ロバート・M・マーシュ著『比較社会学』

Robert M. Marsh, *Comparative Sociology: A Codification of Cross-Societal Analysis*, Harcourt, Brace & World, 1967, xvi+528pp.

近年の社会学の視野が低開発国を含む非西欧諸社会に拡大されてくるにつれて，方法論的にも西欧中心主義的単線的方法にかわって複線的比較方法が自覚的に使用されはじめた．「比較社会学」と題された本書はこの方法を一面的にではあるが整理するなかで「人口転換理論」の検討をもおこなっているので，それを中心としながら紹介することにしたい．

本書は中範囲理論の提唱者でありかつ機能主義的社会学理論の一方の旗頭である R. K. Merton によって指導されたものである．そのため本書は機能主義に立っていることと社会学に加えて文化・社会人類学の最近のデータをふんだんにとりいれていることを特徴とする．構成をみると，第1部では比較社会学の基本的問題点が考察され，第2部では親族，官僚制，階級，生態学，都市社会学および人口学，文化類型の比較論的整理がなされ，第3部は比較方法論，第4部は展望にあてられている．

まず著者の比較方法論を概観する．著者は体系的比較のために諸社会を社会的分化 (societal differentiation) の程度に応じて一元的に配列するのであるが，その指標は職業構成とエネルギー消費量であって，つまり産業近代化が分化を規定すると考えている．このような分化度を基準とすると，ある比較される現象はつぎの四つに分類される．すなわち，1) 模写 (replication)：分化度が同程度の諸社会に同一の現象をみる．2) 普通(universal)：分化度が異なる諸社会に同一の現象をみる．3) 依存 (contingency)：分化度と関連して現象が変異する．4) 特殊 (specification)：諸社会に異った現象をみるが分化度との関連はない．

人口転換理論は第6章で論じられている．著者の定義する人口転換は，1) 高い安定した出生率と高い変異する死亡率とのあいだの準均衡から，2) 低い変異する出生率と低い安定した死亡率とのあいだの準均衡への移行である．上の比較方法に基づくとこの人口転換は模写や普遍という側面はもっていないが，依存と特殊という両側面はもっているとされるのである．すなわち人口転換は社会的分化の進展と関連する側面もあるが無関係の側面もあるとされる．

それをもう少し詳細にみると，まず依存の側面としては，

1) 出生の制限は社会的分化度が増加するにつれて体系的に広い範囲で成功する．
2) 高度に分化した社会では，結婚延期，有配偶率の低さ，避妊，を通じて初期に出生を制限する．分化度の低い社会では，もし出生制限があれば，堕胎や幼児殺しを通じて後期に制限することが多い．

また特殊の側面としては，

1) いくつかの国では人口転換の初期段階において高い安定した出生率が維持されるかわりにさらに増加する．これは分化度と関連しない特別な要因のためである．
2) 死亡率が減少し人口増加が1人当り所得を上回ると，出生減退の与件としての経済的社会的変動が起らない．その結果人口転換の後期段階はマルサス的人口抑制が働きはじめるまで到来しない．
3) 人口転換の初期における出生率と死亡率は，現在の低開発社会の方が同等の分化度であった時代の西欧社会よりも高い．
4) 人口転換過程における死亡率の減少率は，現在の低開発社会の方が同等の分化度であった時代の西欧社会よりも高い．

人口転換という現象が社会分化度つまり産業近代化と関連する側面や無関係な側面をもっているという指摘はたしかに肯定されてよいのであって，それが本書の功績であろう．しかしながら，この現象をそのレベルにおいてのみ解釈して足れりとしていることは，本書の立つ機能主義理論の限界をさし示しており，より構造的な比較方法論の構築が望まれる．

(駒井　洋)